

佐賀新聞 2015(平成27)年6月2日付

佐賀藩の藩校・弘道館は、天明元(1781)年、計画的な人材の養成を目的として創建されたが、文化・文政期に入ると活気を失い不振に陥った。天保11(1840)年、10代藩主となった鍋島直正は移転・拡張を行い、藩政改革と併行して教育改革を断行した。規模を約3倍にし、在籍する生徒は10000人を超え、7才から25才の藩士の子弟が通う大規模な学舎が建設された。

入学すると漢籍の暗誦(あんじゆ)を行うことから始め、漢文で書かれた書物の意味内容の解釈はせずに、上級生の後に続き

「俊英が育った弘道館」

寄稿

佐賀城本丸歴史館 南里 昌芳
・学芸担当

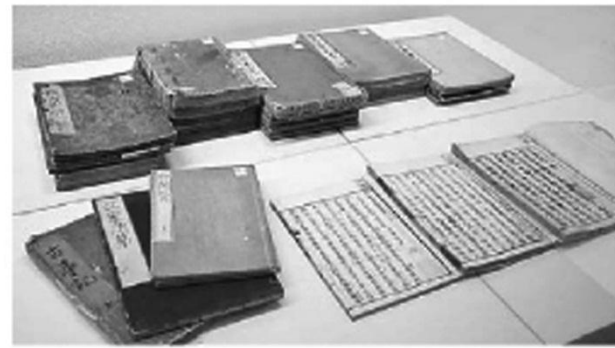


論破ではなく集団研究

声を上げて文字を習い覚える。一定の書物の暗誦を達成すると先生から少しずつ文章の解釈を交えながら読みを習った。

一通り読めるようになる。先人の解釈などについて調べながら自分なりの解釈を構築し、それを討論する段階へと進んだ。討論はある者が発表を行い、意見交換、別の者の発表、さらに意見交換という流れで行われた。

20〜30人で構成された生徒



だけのグループで、くじ引きによって発表する順番が決まられ、教科書の解釈を述べていき、意見交換をする。討論が激化したり、解釈が誤った方向に展開したりしたときだけ、先生が間に入り発言をした。

相手を論破することに主眼を置くのではなく、生徒を主体として行われる集団研究方

「弘道館使用教科書」
(江戸時代・鍋島報効蔵)

式の学習だったと考えられる。また、書物の解釈だけではなく時事問題についても盛んに討論されていたようである。このように基礎・基本を徹底して覚え込み、自分で文章の意味を調べ考え、討論を行うという教育システムによって生徒は鍛えられていた。

全国からの遊学者が集まる昌平齋(昌平坂学問所)で行われていた討論で、弘道館出身者は「議論をすれば、いつも他藩のものには負けなかった」(「日本の藩校」奈良本辰也著)と評価されていたこ

この背景には佐賀藩の教育システムがあったと言える。佐賀藩の藩士たちが討論の場を発する言葉は、調査や討論の習慣によって鍛えられたため、相手に対して説得力を備えていたのだろうと思われる。幕末維新期に活躍する多くの人材を輩出した藩校・弘道館の特徴的な学習スタイルは、現在の私たちの学びにも通じるものがあると感じる。

◇ ◇

「藩校・弘道館の育み」展は14日(日)まで。問い合わせは佐賀市城内の佐賀城本丸歴史館、電話0952(41)7550。